

今年のGWは町の裏側を回遊してきました。出発店は私が四十数年前、富士食品を創業した木更津市貝淵から、堀割沿いに上総記念病院の裏の細い路地を抜け、将基面先生のお宅の通りから翠橋を渡り、みまち通りを横切ると八剱八幡神社の裏手へと出ます。

この横丁は名物の焼鳥屋、カバン店等があって栄えた所でした。今では壁がはがれ、看板は落ちて、折から薄い夕暮れの光が射し込んで廃墟を画いた油絵の世界でした。

私以外にも6~7人の若者たちが、藤澤周平が書き、バルビゾン派が画いた夕暮れの光をカメラで追っておりまして。そこから後戻りして、その昔木更津の銀座通りと言われ、人の群れに押されて歩いた「みまち通り」へ出ました。

今日は金曜日？と思わせるかのように、シャッターが下りた店が多く、何匹もの猫が悠々と日向ぼっこして、久しぶりに歩いたみまち通り、まさかと思うさびれ方で、少年の日に歩いた街の栄枯盛衰の夢の跡と見る思いでありました。八剱神社に手を合わせて、弁天様の角を右へ曲がりますと先日の火事の焼け跡があり、その広さにびっくりしました。表道路から見えない、古い木更津の街が内蔵されて居りました。フジナミの本店に沿ってやっと一人通れる「居酒屋きんき」の路地を抜けると「見番とはこや」の前へと出ます。つい先ごろまで6~7名だった木更津芸者衆ですが、今で16~17名になったと宴会で披露され、木更津花街復活の兆しがある気配です。この西側一帯は、佐世保の穴蔵飲食街に似た弁天町飲食店街が混然一体となって、夜になると輝きを増して不夜城となります。大通りからは全く見えない古い木更津のまちを象徴する奥深い街であります。通りを隔てた税務署の横を抜けて、證誠寺の庭へ入ると、よく手入れされた季節花木が緑に映えて素晴らしい景観を見せてくれました。観光客らしき人は二組、静かな佇いも良いが少し寂しすぎました。奥から寺のおばあちゃんと黒潮のおかみさんが私を見つけて声をかけて下さり「あなたが欲しかった“破れ大壺”をあげるから取りにおいで」と言ってくれました。そう言われる前から私が所望していた逸品であります。

幾度も頭を下げて感謝する「今日は大吉だ！」と狸に手を合わせました。伊豆島から祇園に入り、昔馴染みのすし屋に入ると親父がすぐに声を掛けて来て「この頃はめっきりお客さんが少なくなりました。どうしたらいいですかね？」と言われ、「昔は店の親父さんやおかみさんが盆暮れには手拭い一本持ってきて御礼のあいさつ回りをしたもんだ。今じゃ通りであっても挨拶もできない人もいる。客を待っているのではなくて客のところへもっと足を運んだらどうかね！」と言うと親父は黙ってうなずいただけでした。

6日の夕方、私は清和のあるラーメンが食べたいと言うので、仲間たちと訪ねて行きました。まだGW中なのに暖簾は外れていました。

商人は新しい情報、技術も必要ですが、親父や祖父母がどうお客様に接してきたか？商機を逃がすことなく働き、お客様が満足していただく事によって繁栄させて頂いた原点を学ぶ時であります。

客が来ないのもしかしたら不況だけの理由ではないのでは……。